

## ．国際経営学科の科目履修

### 1．カリキュラム体系の特徴

本学科では、「国際経営」教育の目標を達成するために、学科の特徴を踏まえたカリキュラム（教育課程）体系が編成されている。それは従来の大学教育の枠組みを変革し、学問の発展と時代の要請に十分に応え得る独自のものとなっている。

本学科のカリキュラム体系は図表2に示すとおりである。その編成にあたって前提とした基本的考え方は、次の3点に要約される。

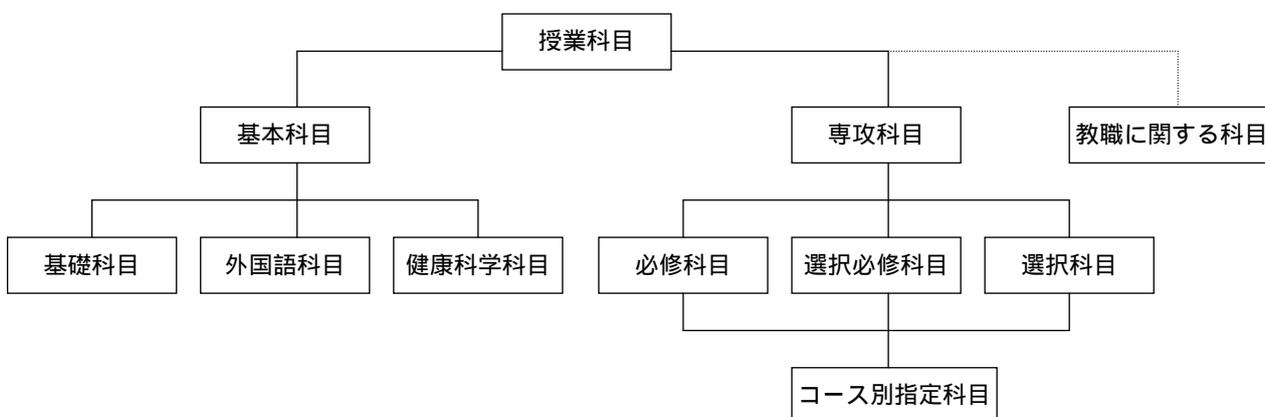
「国際経営」教育の推進という本学部創設の理念を具体化したものであること。

現在の大学教育がかかえる基礎的問題を解決し、教育内容の改善をはかること。

学問の進展と社会のニーズに対応できる科目体系であること。

諸君がカリキュラムに沿って履修計画を作成し、学修するにあたって、本学科のカリキュラム体系を基礎づけているこれら3つの考え方をまず正しく理解しておくことが必要である。

<図表2 国際経営学科のカリキュラム体系>



図表2にみるとおり本学科のカリキュラムは大きく基本科目と専攻科目から構成されている。基本科目は、経営学部の基本理念である「国際人としての素養・資質を備えた人材の育成」を実現するための基本的な科目群である。専攻科目は、「国際経営」教育体系を構成するマネジメント機能、経営環境、国・地域の各分野を修得するための科目群からなっている。

基本科目の主たるねらいは、自分で問題を発見し、考え、解決する能力を備えた人材を育成すること、自分の考えや感情などを口頭、文書、身体などで表現できる人材を育てること、の2点である。基本科目はこのような目標を達成するために、さらに基礎科目、外国語科目、健康科学科目の3つの科目群に分けられている。まず、基礎科目は大学で学ぶ上で必要な基礎的なものの考え方や表現技法を学ぶ科目群、および将来設計を見据えた修学の意味を考える科目群とからなる。必修科目として2006年度以降入学者は「FYS（基礎演習）」と「基礎演習」の2科目（2002～2005年度入学者は「基礎演習」と「基礎演習」の2科目）、選択必修科目として「文章表現法」と「速読法入門」ならびに「キャリア形成論」と「リーダーシップ論」の4科目が1年次に配当されている。次に、外国語科目は、「国際経営」教育の理念に基づき選択の範囲を広く与えている。英語をはじめドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語および韓国語の7外国語のうちのいずれかの言語について、会話講読、作文、時事、表現、LL演習など多様な内容を学修する。また、外国人留学生に日本語の選択必修を認めている点も特徴である。さらに健康科学科目は、従来の保健体育科目の内容を新たな理念のもとに整備した「健康科学」により構成されている。単なる心身の健康保持のみならず、身体運動に関する科学的思考能力の育成も目指している。基本科目の詳細は、後の「基本科目の特徴と履修」に述べるとおりである。

次に、専攻科目は、国際経営を体系的に履修し、国際経営人として活躍できるよう、多様かつユニークな科目群が配置されている。これらの科目群の中からどのような科目を選択するかについては、修学期間の中にどのような国際経営に関する能力を修得するかによる。本学部では学生諸君が4年間で効率よく「国際経営」を学修できるようにコース制を採用している。コース制の詳細は後の「国際経営学科の科目履修4．コース制とその特徴」に述べるとおりである。

諸君がどのようなコースを選んでも、本学部の国際経営学科を卒業する学生として共通に学修しなければならない専

攻科目群として、必修科目がある。「国際経営」修学のための基礎的知識や科学的なものの考え方を涵養するために「経営の基礎」、「会計の基礎」、「異文化コミュニケーション」が、また今日必要不可欠のコミュニケーション手段となっているネットワーク技能の修得と理解のために「コンピュータ基礎演習」、「コンピュータ応用演習」、「コンピュータ概論」が1年次の必修科目として配当されている。また、それぞれの選択したコースごとに「国際経営」の専門能力を高めるために、少人数からなるゼミナールが「演習 ~ 」として3・4年次に必修科目として配当されている。

専攻科目の選択必修科目および選択科目は、別掲『専攻科目 教育課程表』に見るとおりである。これら座学を主とした科目群に対して、実社会との体験を通じて国際経営の学修と研究に社会的検証の場を与える目的から「実社会体験研究」が3年次の前学期に選択必修科目として配当されている。いわゆるインターンシップを含む「実社会体験研究」は、本学部の目指す国際経営の場において活躍できる国際経営人の育成、ならびに4年次の演習 に必須となっている卒業論文の作成に、学生諸君にとって貴重な体験の場を提供するものと期待している。また、これら科目群は、学生諸君の選択したコースごとに修得しなければならない科目や推奨される科目が異なる。そのためコースの選択と専攻科目のうち選択必修科目および選択科目の履修方法との間には密接な関係があり、学生諸君はこの点に十分注意する必要がある。なお、詳細については、「 . 専攻科目の特徴と履修」をぜひとも参照されたい。

## 2. 科目履修のあり方

本学科における科目履修の形態は、半年を1つの独立した学修期間とするセメスター制（前学期・後学期の2学期制）を基本としている。セメスター制を採用することで外国大学との学期制の違いを解消し、海外留学が容易に行えることになる。また、セメスター制によって学修成果を各期ごとに確認できるほか、各人の学修の方向や進度に合わせ各期ごとに科目履修登録ができるようになる。したがって、すべての科目が半期科目（前学期もしくは後学期に配置）となっている。

大学4年間で、必要な単位数を計画的規則的に修得するために、科目配当は年次ごとに行われている。科目の履修および単位の修得は配当年次またはそれ以上の上位年次で行うことができる。他方、1年次と2年次では、それぞれ2年次と3年次に配当されている上位年次の授業科目の履修は原則としてできない。また、配当年次で履修しながら単位の修得ができなかった科目については、次年度以降において再び履修することができる（必修科目の場合は同一科目を再履修しなければならない）。しかし実際には、時間割の都合などで再履修が難しくなるので十分に注意する必要がある。

次に、1年間で履修できる単位数には制限が設けられている。これは、大学での勉学は、各科目ごとに、授業を中心に十分な学修時間をあてて、しっかり研究する必要があるからである。本学科では、年間の履修は基本科目および専攻科目をとあして44単位を上限とし、さらに半期の履修は31単位までと制限されている（教職課程など別課程の科目は履修制限の枠外とする）。ただし、直前の学期の成績優良者（教職関係科目を除き、直前学期の修得科目全素点平均85点以上または履修登録科目全素点80点以上の成績を修めた者）には、半期6単位、年間12単位までの履修単位数の制限を超えて科目登録することが認められている。一人でも多くの学生が、しっかり勉強して成績優良者に与えられるこの特典を自分のものとし、履修計画の促進に役立てることを期待する。

## 3. 進級および卒業の要件

本学科では、2年次から3年次に進級する段階で、いわゆる進級制を採用している。この制度の趣旨は、学生諸君が自己の科目履修計画に沿って着実に学修に励んでいるかどうかを確認し、必要に応じて履修計画の見直しや学修生活の改善などの指導を行う機会とすることにある。また、3年次からは「演習 ~ 」における専門的な学修と卒業論文の作成を目標とする本格的な研究が行われるため、2年次までに基本科目を中心とした一定の学修成果の積み上げが不可欠となる。

進級の要件は、2年次終了までに合計50単位以上修得しなければならないこととなっている。この50単位のうちには、基本科目から、2006年度入学者は「FYS（基礎演習）」および「基礎演習」を含む18単位（2002~2005年度入学者は「基礎演習」および「基礎演習」を含む18単位）が含まれていることという要件が課されており、単位数さえ満たせば進級できるというわけではないことに注意されたい。もし入学後勉強を怠ってこれらの要件を満たさず、3年次に進級できなくなった場合には、大学を4年間で卒業できないという事態になる。さらには、在学4年を超えて進級要件を満たし得ない者は本学より除籍される。くれぐれもこの点に留意して学期中は学修に努めるようにしてほしい。

本学を卒業して学士（国際経営学）の学位を取得するためには、本学に4年以上在学し、学則に定める卒業要件単位数124単位を修得しなければならない。この124単位は卒業する上で必要な最小限の要件であり、各人の希望と必要によりそれ以上の科目履修と単位修得ができることはいうまでもない。卒業要件についてはある程度の余裕をもって科目履修を行うことが望ましく、また、国際経営の広範な科目の中から関心の領域を広げ多くの科目を履修することが好ましい。124単位の修得要件は、基本科目が基礎科目8単位、外国語科目8単位、健康科学科目2単位の合計18単位、また、専攻科目が各コースとも必修科目20単位、選択必修科目28単位および選択科目58単位の計106単位となっている。なお、

他学部・他学科開講の専修科目もしくは専攻科目の単位を修得した場合、そのうち12単位までは本学科の専攻科目の選択科目に換算し、卒業要件単位数に算入できる。

#### 4．コース制とその特徴

創設当初の学部理念をさらに徹底し、在学生諸君の専門性をより深化させるために、本学部ではコース制を実施している。コース制は、国際経営の学修にあたり、将来の希望とそのため準備を早い時期から自主的に取り組んでもらうために設けられている。コースを選択して所属する時期は1年次後学期からとなっている。これは学生諸君の専攻をよりきめこまかに、またより早く選択させることで、4年間の学修をより体系的に支援していこうとするものである。学生諸君は5つのコースのうちからどれか一つを選択して登録することになる。また一度選んだコースは、原則として変更ができない。学生諸君は自分が何を大学生生活の目標とするのか、そのためにどのコースが自分にとって最適であるかを、時間をかけて考える必要がある。コースの選択はその後の学修計画を決定付けるので、熟慮して選んでほしい。

設置されている5つのコースとその特徴は、以下のとおりである。

##### (1) マネジメントコースの特徴

国際的視点をもとに企業経営を体系的、論理的、総合的に学ぶ。企業の仕組み、すなわち企業組織の成り立ちや特性、問題点等を知り、企業が展開する多様な経営活動の方法論や理念を熟知することは、先進的で先駆的な社会人となるために不可欠な要件である。また国際社会が急速に変化を遂げている今日、企業経営において適切な管理運営を行い効果的な企業活動を展開して成果をあげるためには、経営学の体系的で高度な専門知識が必須となっている。

経営管理すなわちマネジメントの全体像を知ってもらうために、本コースでは経営資源（人・モノ・金・情報・文化など）の組み合わせや活用方法を体系的、論理的に学ぶことから出発し、様々な経営学諸領域の学問分野に関する専門知識を体系的、かつ総合的に修得していく。特に、現代では非営利組織や政府自治体、公共機関でもマネジメント的素養が強く求められており、開講科目を適切に選択して体得した成果、すなわち専門知識は社会の広範な方面で生かせるものとなる。

##### (2) 会計コースの特徴

会計コースは、経理や税務のスペシャリストに代表される有能な会計人の育成を目指すコースである。具体的には、現代社会で重要な役割を果たしている会計や国際会計に関する基礎知識や技能を修得し、国際ビジネス社会で活躍できる人材を育成すること、税理士、公認会計士、国税専門官などの国家資格を取得し、将来は職業会計人等として活躍できる人材を養成すること、日商簿記1・2・3級等の技能認定級を取得し、企業や官公庁で経理やマネジメントを担当できる人材を育てること、大学院に進学し、会計に関する応用的、専門的な研究に従事するための基礎的な知識や技能を身に付けさせること、自営・起業などに役立つ管理会計・簿記会計の知識を修得し、ビジネス社会で活躍できる人材を養成することなどをコースの指導目標としている。

会計コースでは、会計関連科目として「会計の基礎」、「簿記原理」、「制度会計論」、「原価計算の基礎」、「会社簿記」、「管理会計の基礎」、「会計監査総論」、「法人税法」などを設置し、会計コースに特有の専門性を修得するカリキュラムを編成している。「演習・・・」では、会計コースに所属する学生を徹底指導するための実践的で少人数制のゼミナールを実施する。

##### (3) 経営環境コースの特徴

世界から脅威の目を向けられる急成長を遂げた日本企業も、90年代に入って以降その多くが存亡の淵に立たされるほどの苦難を味わっている。最大の問題は、企業をとりまく広い意味での環境、つまり「経営環境」の劇的な変化を的確にとらえることができず、機敏に適切な対応ができなかったということである。

経営環境コースでは、「経営管理」という面から企業を見るのではなく、むしろ企業を取り巻く「経営環境」の側に目を向ける。具体的には、IT（情報通信技術）革命の進展、経済のグローバル化と国際政治の不安定、資源・環境問題の深刻化、先端技術（生命科学や脳科学の進展、バイオテクノロジー、ナノテクノロジーなど）の革新、日本社会の劇的な少子・高齢化の進展、日本の政府や自治体の財政破綻等々である。これらの本質の理解に努め、そこから企業のあり方や経営の諸課題に迫っていく。

経営環境を扱う以上、予期しない変化をも素早く感知し、その問題点や対応策を探り、自分の考えを明快に説明する能力が求められる。そのために、インターネットを駆使して世界中から速やかに情報を収集・分析し、パソコン等を活用して説得力あるプレゼンテーションのできる能力を重視する。併せて、経営環境の変化を絶好のビジネスチャンスと受けとめ、果敢に挑戦する積極姿勢を酒養していきたい。

##### (4) 国際コミュニケーションコースの特徴

21世紀は人間が国家の枠を越えて活動し、ITの発展で世界のどこでも情報の受発信が可能となる時代である。また温暖化、環境汚染、難民、女性問題、貧困、感染症などグローバルな規模で取り組まねば解決しない問題も山積している。日本国内での国際化も大きな課題であり、異文化相互のコミュニケーションの重要度は増している。本コースの主

たる目的はますます国際化する社会で活躍しうる人材を育てることにある。生きた外国語に接すると同時に有意義な異文化体験を得るため<スタディー・アブロード(略してSA)プログラム>が設けられており、本コースの学生は、短期留学でも最大限の成果が得られるよう考案された事前授業を受け、海外の大学で一定期間学ぶことが義務づけられている。

このほかにも本コースには、コミュニケーション能力を高め、世界の各地域の専門的知識を身につけ、現代の社会・文化・政治状況に対する洞察力と発言力をみがくために役立つ様々な科目が設けられている。今や海外で仕事をするしないにかかわらず、21世紀の日本社会に生きていく以上、新しい国際感覚のともなったコミュニケーション能力は必須のものとなりつつある。本コースはこのような時代のニーズに対応した教育を目指している。

#### (5) スポーツ&マネジメントコースの特徴

スポーツ&マネジメントコースでは、地域社会の人々を対象に、健全な精神や体力を育てるためのコーチング機能を果たせる人材を養成することに力点が置かれている。高校時代までの競技活動を土台に、入学後も競技スポーツの活動を継続することで自らの精神力や体力の向上をはかるとともに、スポーツ文化や健康管理に関する専門的知識を修得し、地域社会においてスポーツ指導者としてリーダーシップを発揮することが期待される。

そのためにも、在学中はスポーツ活動をマネジメントの面から捉える経営管理者としての基礎的素養をしっかりと身につけることが必要である。また、生涯スポーツの時代を迎えて、人々の健康と体力の維持・向上のため年齢構成別にさまざまな仕組み作りと運営をこなす企業家精神を涵養することも重要視される。同時にこれら地域に向けた活動を無償でおこなう場合も予想されることから、ボランティアの素養も要求されてくる。

かくして、本コースの卒業生の人材像としてはつぎのようなものが考えられる。

- ・スポーツ活動をマネジメントできる経営管理者としての基礎的素養を身につけている。
- ・リーダーシップの素養と、スポーツ指導者としてのノウハウをもち、体力維持、健康管理、スポーツ文化面で地域社会に貢献できる。

## 5. 国際教育の推進

本学科が「国際経営」についての研究・教育を中核としながら、国際人としての人材の育成に努めることに重点をおいている点は、これまで述べてきたとおりである。そのために、正規のカリキュラムの中で海外実習を義務づけたり、外国語による授業を実施している。また、カリキュラム外ではいくつかの外国大学と提携し、短期および中・長期の留学制度を設けている。

国際コミュニケーションコースを選択した学生は、「スタディー・アブロード」(2年後学期、2単位)の科目を必ず履修しなければならないが、夏季または冬季に実施される海外実習が義務づけられている。また、他のコースの学生も専攻科目の選択必修科目としてこの科目が配置されており、履修すれば海外実習に参加することができるようになっている。国際コミュニケーションコースの学生はもとより、他コースの学生でも「スタディー・アブロード」を履修すれば海外実習が義務づけられるので、事前に渡航費等の資金計画をきちんと立てておく必要がある。なお、どのコースの学生でも「スタディー・アブロード」の履修には、実習準備のための講義科目である「スタディー・アブロード」(2年前・後学期)の履修が前提となる。

本学科における外国語による授業は、米国カンザス大学やカナダのビクトリア大学から本学への交換留学生向けクラスや、本学部所属の学生で海外に留学希望する学生諸君向けクラスなどで実践されている。

また、カリキュラム外の事業として、いくつかの外国大学との学生相互交流、短・中期の海外研修が実施され、学生諸君が在学中に海外での学修ならびに生活体験をもつ機会を提供している。提携校への中・長期留学期間中に取得した単位は、帰国後、所定の手続きを経て、「スタディー・アブロード」(2単位)等に認定される。できるだけ多くの学生がこのような制度を活用し、海外研修に参加するなどして、国際人としての豊かな素養を培っていくことを期待している。

なお、本学部の海外留学の詳細については、パンフレット「Global Consciousness」を参照のこと。また、国際センターが主催する本学全体の留学制度については、国際センターが発行するパンフレットを参照すること。